

〔座談会〕

周恩来総理を偲ぶ

西園寺公一 新井 宝雄
岩村三千夫(司会)

岩村：今年になりましてから、世界的な革命家であり、政治家である周恩来総理が逝去され、日本の日中友好を望む者はもちろん、世界的に惜しまれ、追悼されています。香港の新聞、あるいはアメリカの新聞なんかを見ますと、ニューヨークなどでも小さな追悼集会がいくつも開かれている。東京でも2月10日に、「周恩来総理国民追悼会」が開かれることになっています。

きょうは、『中国研究月報』で周総理を偲び、哀悼するという意味でいろいろお話しをうかがいたいと思います。

西園寺：私は永い間北京に在住し、周総理にお目にかかることがたびたびありました。最近はずっと御病気だということを聞きまして、いつかはこういう日が来るとは思っていたのですが、やはりいざそうとなると非常に大きなショックで、大変惜しい人をなくしたという気持ちでいっぱいです。

いろいろと話す前に、まず周総理の人柄について述べたいと思います。周総理は世界の政治家の中で最もユニークな人柄の持主だったと思います。周総理について、実務家だとか卓越した外交家であるとよく言われるが、私が接した中でいちばん強く感じるのはやはり、一貫して毛主席の片腕として毛沢東革命路線を擁護し実践してきたということです。周総理はすぐれた革命家、ということが私の痛感しているところです。

新井：私は、周総理の追悼会が1月15日に行われたちょうどその翌日に中国を訪問しました。一緒に行きましたのは埼玉県各界の人たちで、その人達はみな初めて中国に行った人ばかりでしたが、

皆がいろいろな事実を通して中国の人達が周総理の逝去をいかに強く悼んでいるかということを感じていました。団員の人達が一様に言ったことは、“仮に日本の総理が亡くなれることがあっても、日本の人民はこれほどまでに悼むだろうか”ということでした。『人民日報』はまた、各国の首相、政党からの弔電をずらりと掲げていましたが、世界中からあれほど哀悼の意が表されるということとはかつてみななかったのではないのでしょうか。

やはりこのことは、周恩来総理が偉大な革命家であったということ、中国の人民はもちろん世界の人々が知っていたということだと思います。周総理が一身を中国人民のために尽し、そればかりでなく世界の平和を希求し、そのために精力的に貢献したということに対して、世界中の人が認めたということですね。

偉大な革命家

岩村：周総理は長い革命経歴があると同時に、新中国になってから今日まで行政的地位にもあられだし、国際政治の面でも非常に大きな影響を与えてきました。ですから一般には、周総理のそういう巾の広さとか、それから現実的な力を発揮するいろいろなやり方に敬意を表する訳ですが、しかし西園寺さんが先に言われたように、そういうもののすべてが革命家としての周総理の品性というか本質から出発しているという面から考えてみると非常に大事だと思います。この間、周総理追悼会の模様を伝える映画を見たのですが、追悼会に参列しているのはほんとうの大衆ですし、その

大衆が涙を流しながら追悼の意を表するために列をつくっているのを見ますと、周総理をふつうの政治家という概念ではとらえきれないということを感じた訳です。

西園寺：私は、周総理に接するたびにつくづく思うことは、あの人間的な暖かさ、これが一つです。もう一つは、原則の問題に關するとやはり厳しい、しかしその原則を相手におし付けようとせずに非常に細かい配慮と粘り強い説得で納得させて原則を通すということです。これは周総理に学ぶべきほんとうの作風だと思います。こういうことは人間なかなかできることではなく、やはり周総理は長い革命経歴の中で身につけてきたものだと思います。中国の革命というものはやはり、ほんとうの少数から出発し、ほんとうに大衆を大事にし、大衆を説得してきて味方につけて仲間をふやしてきた。ですから、あれだけの長い革命経歴をもつ周総理は、やはりそういう大衆との接触の中から人間関係を大事にするということをしてきた。このことは大事な点ではないかと思います。私が先ほどに周総理は偉大な革命家だと言った一つの意味は、常に大衆の側に立っていた。徹底して大衆に奉仕していたということです。これはもちろん毛主席の偉大な指導に従い、しかもその担い手としてやってきた経験の中から、ああいう立派な人格ができたのだと思います。周総理は青年時代から革命に参加して、生涯を人民のために奉仕した。ここから彼のすぐれた人格とか作風が生まれてきたのだということを感じます。

周総理がよく私に言われたことは、中国の建国の大理想というものは社会主義革命をすすめていづれの日にか共産主義を実現するということが一つで、もう一つはほんとうの意味の世界平和のために中国は何らかの役割を果たしたい、だから中国は今貧しく発展途上にある国ですが、にもかかわらず第3世界、発展途上国にささやかながら援助をしている。これは、世界平和を実現するため

の一つの小さな努力だと思います。人と人との間に支配・被支配、搾取・被搾取という関係があってはならないのと同時に、国と国の間に支配・被支配、搾取・被搾取という関係があってはならず、そういう関係が存在する以上世界がほんとうに平和になる可能性もありませんよ。世界平和の基礎になるのはあらゆる国が平等に発言しあう関係になるということです。そのためには、第二次世界大戦後に多くの独立国が生まれたが、形式的な独立でそれを裏付ける経済的な独立のない場合が多い。あらゆる国が政治、経済の2本足で立ってほんとうの独立を勝ち得てはじめて平等に発言し合うことができる。周総理は、このために我々はささやかながら努力をしているのです、中国は早く社会主義建設をすすめてもう少しでも余力をつくって援助をしたいんだ、ということを書いてました。これは、中国の大理想であると同時に、中国は超大国には決してならないという意味ですが、このことは中国の対外援助八原則をみるとはっきりわかることです。

岩村：周総理を理解し、それから現在の中国のこれからの針路を理解するうえで、中国のもつ原則性と柔軟性の結合、統一という面を理解することは大事だと思います。その点、日本では歪められて、よく理解されていないように感じますね。

新井：原則ということについて言えば、中国では新中国成立以前も以後も一貫して原則を通してきた訳です。新中国樹立のために解放前には、帝国主義、封建主義、官僚資本主義に反対し、これを打倒して新民主主義革命を達成するという原則を徹底してやってきた。結局、それはどこに帰着するかというと、虐いたげられている広大な人民の解放ということになる訳で、非常に原則的であった。新中国の成立後は、社会主義革命を推しすすめ、社会主義と資本主義の間の矛盾が絶えず発生している状況の中で、その資本主義的なものに対し非常に原則的なやり方をとってきた。新中国成

立以後も、毛沢東思想のもとで全く忠実に「大多数の人民の利益のために」という原則が貫かれてきた。

そういう革命の路線を通して世界情勢を見た場合、先程にも西園寺さんの言われたように覇権を称える国というものがあり、平和五原則を乱す国があるならば、ほんとうの世界平和はありえない。中国ではそういう確固たる信念をもっている訳です。中国のそういう信念から、周総理の時代に平和五原則が提唱されそれがいま世界的にも定着しつつある。この原則に対し第3世界が支持を表明して、起ちあがり、反覇権闘争を展開してきている。要するに、天下大乱ということです。この天下大乱というのは良い情勢なんだ、という認識と原則を世界情勢と結合させ、発展させ世界平和に貢献する。こういうことのために周恩来総理のなし遂げた功績というものは拭っても拭い切れないものと思います。

私達は、今度、周総理追悼会が行われた直後に中国を訪問して、いろいろなところで感動的な場面に出会いました。中国の人民すべてが、幼稚園の子供までを含めてみんな喪章をつけていました。上海の労働者新村を訪問してある家に入って懇談した時のことですが、団員の一人がその家の退職した婦人労働者に労働者の生活などについていろいろ質問したのです。その婦人もむろん快活に答えてくれていました。そのうちに団員が「あなたは周総理が逝去されて喪章をつけていますが、その喪章はいつ頃までつけているんですか？」と聞いたのです。すると、その婦人は、がらっと表情を変え、「周総理の話になると私達は涙が出るんです」とひとこと言ったと思ったらポロポロと涙を流し、泣き出してしまったのです。そして、声にならずに「私達が今日あるのは毛主席と周総理のおかげです」と言うのです。周総理逝去の話になると人民大衆はほんとうに心から泣くのです。我々団員一同も感動させられた訳です。それから、

その家の毛主席の写真を見て「あそこに毛主席の写真が飾られてありますが……。」と聞いたのです。すると、婦人は、「私達がここに毛主席の写真を飾るのは、実は毎日、毛主席にお会いしたい、それだから写真を買って飾っておくのです。毎日毎日、毛主席とお会いして、お話しがしたいという気持ちのあらわれなのです。周総理は毛主席と共に闘い、私達を解放してくれました。」とっていました。指導者に対する大衆の気持ちをこういう言葉で言ってもらえると、私達外国人にはその感情がよく理解できるのです。

北京で作家の謝冰心さんにお会いした時にも、そういう場面がありました。「周総理の逝去に対して哀悼の意を表します」と私達が言いますと、「周総理の逝去に対して日本の代表団に哀悼していただいて、大変ありがたいことです。」と言ったあと、やはり謝冰心女史は言葉が出せないんです。その後は感情がこみあげてきて、声がつまってしまうんです。そして、途切れ途切れに「周恩来総理は偉大な共産主義の戦士で、中国人民の解放のために大きな貢献をされました……」と言うんですが言葉にならない。通訳の人も——若い女性でしたが——涙があふれてきてしまって通訳できないのです。私達は、今回中国へ行ってみて、中国人民が周恩来総理の逝去をどれほど深く悲しんでいるかということを実感をもって知ることができました。それと同時に、偉大な指導者を失って自分達はこれにどう応えていったらいいのか、ということを考えていますね。工場や人民公社へ行きますと、「周総理の遺志を継いで革命のよい後継者になる」、「周総理の遺志は永遠に私達の心の中に生きている」といった言葉を書いた大字報がいっぱい貼られている訳です。つまり、悲しみを力に変えて周総理の遺志を継ぎ、それを今後の中国の建設に生かさなければならない、という決意が満ち溢れているということを強く感じました。

真の“文革派”

岩村：日本では周恩来総理というごく一般に印象に残るのは、西安事変に際しての“説得”“談判”あるいは日本に対しては日中交流を促進する中広い政策を採ったこと、それからニクソンを北京に呼んだことなどになる訳です。いわば、統一戦線的な側面が出てくる。これはこれでまた重要なことだと思います。

以前、中国を訪問した時に重慶に行ったんですが、その時に八路軍弁事処——山上に一つと市内に一つあって、市内の弁事処——を見学したんですが、その周りには全部特務が部屋を借りていて、全く敵の包囲の中で武装部隊を持つでなく断固として活動し、そういう中で厳しい統一戦線を執行していた。鄧小平副総理の「追悼の辞」の中にも「対敵闘争の中で示した確固たる非妥協的態度」とありますが、そういうふうに原則を貫き、また同時に統一戦線をすすめるということをやってきた。そういう貴重な経験が、新中国になってからもどんどん生かされてきているのではないかと私は思っている訳です。その点について日本では、周総理というやれ“現実派”だと言い、“文革派”とずっと対立していたなどということが言われている。周総理が亡くなられてからも、あい変わらずそういうことを言っている人間もいる訳です。文革時期の周総理について、当時西園寺さんは北京にいらした訳ですが、どういうふうにご覧になっていたのですか。

西園寺：私は周恩来総理について考える時に——これは周総理だけでなく、もちろん毛主席についても同じですが——まず、敵に対する態度と味方あるいは味方になりうる可能性のある人に対する態度というものをはっきり区別しているということですね。ですから、敵に対する場合にはたいへん厳格に原則をぶつける訳です。しかし、これから獲得したい人、味方になりうる人に対しては、

統一戦線のやり方を探る。これは非常に巾の広い、しかも段階的なことを考えてやる訳です。つまり、今これを相手に出しても受け入れるはずはないということになれば、やはり第三者からするといかにも妥協的なような、いわゆる現実派的なような態度をとる。しかし、それは実は単にそういうことなのではなく、ちゃんとした一つの目標があり、しかも厳格な原則をふまえて目標がある訳です。その目標に到達するための長期的な展望のうえに、一つ一つ築きあげていくやり方です。これを実際に執行したところに周総理の偉大さがあると思います。ですから、先にも申しましたように相手の立場も考えず、また相手の認識の度合いも考えずに、いきなりこれだ、ということを行わない。そういうふうにやったからこそ、だんだんに友人ができて同志ができて、しかも国際的にもだんだんに支持を得ることができた。これが周恩来総理の偉さだということをつくづく感じますね。

63年から64年にかけて、周総理が陳毅副総理と一緒にアジア・アフリカの13カ国を歴訪した時に、あの時に携えていったのが例の「対外援助八原則」です。私は、その直後ぐらいにアフリカで会議があったので行ったのですが、行くところどころで周総理の人気、周総理に対する支持がこんなに大きいものかと驚いたことがあります。それはやはり、人に対する説得力ということがある訳です。例えば、文革の中で“文革派”と“現実派”の対立があり、それで周総理は“現実派”だというようなことを言うのもいるが、私はほんとうの意味で“文革派”というのは周総理だと思います。あの頃に私は北京にいて、文革の中の矛盾がいろいろ感じられたのですが、今から考えると文革の中でハネ上った奴は全部だめな訳で、しかし周恩来が“現実派”だという場合に、周恩来総理がハネ上らなかったという根拠なんですね。確かに、周恩来総理はハネ上らずに長期的な展望のうえに立って、毛主席の指導をちゃんとわきまえてやった

訳です。しかも、さらに周恩来総理の説得力、それから人間関係を大事にするという人柄があったから、文革の中で無益な犠牲が最少限度に抑えられたのではないかと思います。これは、周総理の非常に大きな功績だと思いますね。だからこそ、文革は中国がこれから社会主義革命をすすめていくうえにおいても、社会主義建設をやっていくうえにおいてもあれだけ立派な終末ができた、というふうに考えています。

岩村：エドガー・スノーが『革命、そして革命』の中で書いていることなのですが、67年あるいは68年だったか文革の中で一部のハネ上った人の影響がかなりあって、国务院を紅衛兵が2日間包囲したことがあった。ところが、周総理は個々に説得して解散させたというのですから、これはたいへんな政治力だと思いますね。新井さんが、北京にいらしたのはその頃よりも後だったでしょうか。

新井：私が中国にいたのは、64年から65年にかけてのちょうど1年間でした。これはちょうど文革のはじまりかける頃のことです。例えば文芸批判とかがなされていた。邵荃麟の中間人物論批判などが出はじめていた時です。ですから、文革がまさに花を開いていた時にはまだ日本におり、文革後にまた中国へ行ったわけです。こうして文革前の中国と文革を経た中国を比較することができたわけです。そして、社会主義というものを建設するのならば当然、文革というものはやらなければならない、当然やるべきだったということを強く感じました。例えば、教育革命ひとつとっても、文革をやってどんなによかったかということがわかりますね。

文革後に中国を訪問した時に、中国の人からいろいろ話を聞いたのですが、その時に、中国の一般の人でも文革が始まった時はこれが何なのか、いったい何をめざしているのか、そしてこれを契機に中国がどういうふうに動いていくのか自分達自身にもよくわからなかったといっていました。そ

して、運動が進んでいく中でその意義を理解していったというんです。こうしてみると、大衆にその運動の意義を理解させ、また、大衆に依拠して運動をすすめていくということがいかにむずかしく、したがって、たいへんに卓越した指導性というものがなければ成功しなかったということがよく分かります。その指導の中心にあって文革を勝利していったのが周総理だったと思います。

昨年、中国を訪問した時、中国の指導者とお会いしたのですが、その時に明確に言っていたことは、文化大革命が基盤になり、その後批林批孔の運動がまきおこり、そしてまたプロレタリア独裁理論の学習運動がおきているが、これは、ソ連のような修正主義の国にならないことを目的にしたものだ、ということです。つまり「反修防修」ということがこの3つの運動を貫く原則だというわけですね。その起点に文革があり、それが成功したからこそ、その後も続々と新生の事物が現われてきているのです。

そういう意味で、今年1月に中国に行った時に感じたことですが、幼稚園の子供までが、新生の事物を理解するようになっているのです。遊戯の中でもそれらを讃える歌や踊りをやっているのです。文革の中から生まれた新生の事物が、まさに幼稚園の子供までを含む大衆の中に浸透し、よく理解されているんですね。ここまで社会主義革命を推しすすめてきたというのは、まさに毛沢東思想を実践してきた周恩来総理の偉大な功績によるものなんですね。

子々孫々の日中友好のために

岩村：私は、66年12月文革が始まってまだ初期の頃に中国を旅行したのですが、その時に案内してくれた若い服務員の人が非常に自慢するんです、周総理を。当時学生が北京に集まっていた、周総理はひとつひとつ宿舎を回って見て、若い者が毛布がかかってなければかけてやり、文革の中で紅

衛兵運動を援助していたんですね。周総理がいかに真剣に取り組んでいたかということを感じさせられる訳です。その後も実際に、批林批孔運動の中でもそういう立場をとられたと思うんです。

そういう一貫した原則を貫きながら、現実には則した政策を打ち出してきた周総理のやり方という面が日本に非常に大きな影響を与えた。例えば、周総理の外交部長時代には中国敵視の“単独講和条約”が結ばれ、それに対しては徹底して厳しい批判をされた訳ですが、しかしながら日本人民との接触はそれによって弱めるのではなくて、強めていくという態度をとった。その人民という場合にも、決して狭く労働者、農民だけを考えるのではなくて、可能な限り広い範囲で接触をされた。1952年には大山郁夫さんにも会われたし、54年には安倍能成さんを団長とする学術代表团、あるいは鈴木茂三郎さんなど各党派の代表团との大会見をやられた。その時にも、アメリカ帝国主義が日中友好を妨碍しているのだとはっきり指摘しながらも、人民の友好は発展させなければならない、日中関係はここ十数年悪かったが悪かったのは十数年であり、良い期間の方が長いのであり長い方を発展させなければならない、と言っていましたね。今聞いても全くすばらしい、巾の広い演説をしました、これは当時『世界』に掲載されましたね。私は、これは周総理の日本に対する考え方の原点ともいえるべきもので非常にいい文献だと思っています。

西園寺：周総理を語る場合に、偉大な革命家であり、偉大な説得力を有していた人というほかにも一つあると思います。それは、非常に勇気のある人だと思います。この点を忘れてはいけません。大衆とほんとうに接触するということは、たいへん大きな勇気があるんです。先ほど岩村さんがエドガー・スノーの伝える話を紹介してくれましたが、あの時に出かけて行って話すというのは全く毛主席の言われるように大衆に依拠し

て、大衆を信頼していなければならないことなんですね。私はその一つの例として、67年国慶節だったかメーデーだったか忘れたんですが、天安門上で演説して、演説が終わると下りてきて大衆の中へ入って、座りこんで話をするというようなことがありました。ところが、あの時はどこに敵がいるかわからない時でしたが、周恩来総理は信念をもっていった。大衆は必ず自分達の味方だという信念を持っていかなければこそ、そういうことができたのだと思います。

日中関係においても、周総理はたいへん巾広いやり方——もちろん一つの確固たる展望をもったうえでのことですが——をしてきていて、必ずしも意見が一致しない人達に対しても話しかけていくということは、やはり相当の自信、確信がなければできないことだと思います。

もう一つの例は、日中の国交回復が成って平和になるための条件の一つとして、中国は賠償をとらないとしていましたね。そう考えた一つの理由は、周総理も言っていたことですが、ベルサイユ会議における列強のやり方に非常に大きな間違いがあったということですね。ドイツに対して過酷な賠償を要求した、そのためにドイツの国民達は苦しい生活を強いられ、その中から怨差の声がおこり、そこから報復主義が生まれ、それを利用してヒトラーが出てきて世界征覇の野望に乗り出し、世界を破局に陥れた。周総理は、「中国はそのままねはしませんよ。」と言っていました。これはつまり、当時500億ドルとか言われていたものを日本から賠償として取ったならば、日本の国民はどれだけ苦しむだろうか、その結果は決してよくない、ここまで見通していたに違いないと思います。中国は日本に対して賠償を要求しない、日本はその賠償に代わる何かをしなければならない。その何かとは何かと言えば、それは日中友好をほんとうに深め、日中両国人民がほんとうの信頼関係のうえに立ち、子々孫々までの友好を築きあげ

てゆくよう努力していくほかないのではないかと思います。やはり、岩村さんが言われた“短い間の不幸な歴史の一齣”というものを、日本人民としてははっきり反省しておく必要がある、精算しておかなければならないと思います。私は、覇権反対の考え方を確立することこそが中国人民の寛大な処置に報いる唯一の方法であり、この覇権反対こそが将来の日中関係の出発点となるものだと思います。と同時に、平和五原則と共にこれからの国際関係を律する二つの大きな柱となると思う。

ですから、日中平和友好条約を1日でも早く締結することは、両国の国益であると同時に、やはりこれだけ日中関係のために尽してくれた周総理の遺志に報いる我々の立場ではないかと思っています。この覇権反対が確立してこそ、子々孫々まで伝わるべき日中友好運動の出発点になると同時に、これから日本が関係を改善しなければならない第3世界との間に信頼関係を生み出す糸口になると思います。

新井：周総理は青年時代に日本に留学して、日中関係というものがアジアにおいていかに重要な位置を占めるかということを考えていたんですね。

西園寺：全くその通りで、私が1970年に中国を離れる時に内輪の宴会をもうけてくれて、その席で「将来の中日関係の重要性を考えて、日本へ勉強しに行ったのでした」とはっきり言っていました。

新井：周恩来総理は、早くから日中関係は子々孫々にいたるまで友好的でなければならないと考えて、日本に留学してきた。しかし、日本は中国という国に対して、あるいは青年周恩来に対してどういう姿勢をとったか。日本は周青年を失望させ、帰国させてしまったのです。このことを、周総理の逝去という機会に考えるべきだと思います。過去の日中関係が不幸なものであったのはなぜか。これについては日本が覇権を称えたことによるものであることを日本人はもう一度考えてみる必要があるのではないかと思います。そうすることが、

ほんとうに立派な日中平和友好条約をつくっていくことになるし、できた条約も単なる文字面だけでなく、両国人民の平和を求める精神によって裏うちされたものになると思います。周総理の逝去について、単にこれを表面的に考えるのではなく、日中関係の原点に帰って考えるべきだと思います。

友好運動のありかたについてですが、かつて日中友好運動の中に意見の対立があり、「統一と団結」でない状況が一時期、見られた。その当時、周総理は日本からの訪中団と会見した際、「友好運動は大衆運動である」という意味の発言をしたことがあり、私はそれが新聞の活字になったのを見たことがあります。周総理は当時から、日本の友好運動をやる人達に対して、大きな示唆を与えていたわけです。政党と大衆団体としての友好組織は違う、ということを早くから示唆していたわけですが、そのことを真剣に考えるべきだと思う。

もう一つは、これほど偉大な周総理が逝去したことに対し、中国の人民および世界の人民が深く哀悼しているという情勢の中で、誰が周総理の死を罵っているか、この問題を考える必要があると思います。周総理の逝去に対する態度というのは、誰が正しい立場に立っているかということとを、はっきり示していると思うからです。

西園寺：もう一つ覇権主義について言っておきたいと思います。周総理は、「日本の人民も覇権主義の犠牲者です。」と言ったことがありますが、これはほんとうに我々の心につき刺さる言葉ですね。それから注意しなければならないことは、ソ連の周総理逝去に対する動きです。彼らは、今回たいへん巧みなやり方をしている。つまり、周恩来総理は“現実派”として毛沢東主義をゆるめながら実際の執務を行ってきた、と「評価」する訳です。こういうソ修の巧みなやり口を、今後注意深く監視していく必要がありますね。

岩村：今日は、雪の中をどうもありがとうございました。
(1976年2月5日)